聖女の姉ですが、宰相閣下は無能な妹より私がお好きなようですよ？２

登場人物紹介
character

レイナ（十河 怜菜）
異世界に『聖女の姉』として召喚された。今はエドヴァルドの邸宅で居候をしている。明晰な頭脳を持つが、妹へのコンプレックスがある。独占欲を前に出したエドヴァルドには押されがち。

エドヴァルド・イデオン
アンジェス国の宰相。冷徹な性格だが、レイナを召喚したことに罪悪感を抱えている。また、レイナのことを知っていくにつれて独占欲を次第に隠さなくなってきている。

フィルバート・アンジェス
アンジェス国の国王。エドヴァルドとは気心知れた仲だが、その内面には仄暗いものを隠し持っている。

マナ（十河 舞菜）
レイナの妹で、異世界に召喚された『聖女』。必要以上に前向きで視野が狭い。レイナを「なんでもしてくれる姉」だと思っている。

ファルコ
公爵家お抱えの諜報兼、護衛組織のトップ。レイナとはとある依頼で主従関係。

イリナ・ハルヴァラ
現・ハルヴァラ伯爵代理の気弱な夫人。

ミカ・ハルヴァラ
イリナの息子で、無邪気に見えるが聡明。

プロローグ　見知らぬ夜空を見上げて

湯船に浸かり、身体を温めて、ベッドに潜り込んだはずだった。

「……眠れない」

どのくらい時間が経ったのか分からないまま、結局私は再び起き上がって、サイドテーブルにあった飲みかけのノンアルコールサングリアを片手にベランダに出た。

ほんのひと月半ほど前までは、日本の学歴社会においての頂点に君臨していると言っても過言じゃない大学に、意気揚々と通っていたのに。

家族を振り切り、妹を振り切り、誰に煩わされることもない未来は薔薇色のはずだった。

それが、なぜ。

飲み物を片手に、見知った星座がひとつもない夜空を見上げているのだろう。

一人暮らしをしていた時とは似ても似つかない広さのベランダに、アイアンチェア二脚と丸型のアイアンテーブルが置かれている。私は日本とは比べ物にならないほど星の多い空を苦々しく見つめた。

目の高さに掲げたグラスの中身を飲んだところで、ぶどうジュースにフルーツの浮かんだそれで

は、酔って見た夢と思うことも出来ない。
「異世界で何してんだろ、私……」
――答えは返らない。
正確には、どうやって、は分からなくとも「何故」は分かる。
やってくれたのは、双子の妹・舞菜だ。
『たった二人の、血を分けた双子の姉妹だもん！　マナを助けてくれるよね!?』
異世界に呼ばれ「聖女」としてちやほやされるという都合の良い部分だけを享受し、そうあるための努力は最初からするつもりもなかった妹が「足りない部分は姉が補う」などと、相手に気軽に吹き込んだ結果――私は異世界に召喚されたのだ。
六年越しの家庭内叛乱を成功させて、誰にも後ろ指を指されない一流大学に入学を決めて地元を離れ、卒業後は自由になった自分の人生を謳歌するはずだった。そんな私の未来設計を、妹はたったの一ヶ月で叩き壊した。
ある日いきなり図書室で腕を掴まれ、気付いた時には私は中世ヨーロッパ仕様な宮殿の中に立たされていたのだ。
アンジェス国――登場人物も設定も、何もかもが乙女ゲームであり戦略シミュレーションゲームでもあった〝蘇芳戦記〟と酷似した世界。
この世界では各国を繋いでいる〝転移扉〟を維持出来る魔力を持つ者は〝扉の守護者〟と呼ばれる。

鉄道も飛行機も存在しない、馬車移動が主体の世界で〝転移扉〟の存在は非常に重要だ。それゆえ、それを維持するだけの魔力を持つ者は、国から王族にも匹敵するほどの手厚い保護を受けている。
そして、〝扉の守護者〟が男性であれば「聖者」と呼ばれ、女性であれば「聖女」と呼ばれている。世間一般にイメージされる祈りで浄化作業を行うような聖女像とは趣を異にしているのがこのゲーム世界だった。
多分妹は今でも充分には「聖女」の役割を理解していないだろう。
その結果、私を召喚するなどという強硬手段に出たのだから。
私が求められた役割は妹の補佐。私には魔力なんてものは欠片も存在しなかったにもかかわらず、だ。魔力があろうと、それ以外何もしない「聖女」に、召喚した側が早々に不都合を覚えたのだろう。
だからと言って、片道切符の強制招待はいただけなかった。
挙句、日本に戻る術もないと知ればなおさらに、妹に縛り付けられたままの生活などごめんだと、そう思って、王宮さえも早々に出て行くつもりではいたのだけれど。
ぶっちゃけ住所不定無職の状態で未知の世界へ飛び出していくほど、お花畑脳にはなれなかった。
だから数多の不満と不安はいったん全て呑み込んで、アンジェス国宰相であり、大学の図書室から私を引きずり込んだ当事者であるエドヴァルド・イデオン公爵の邸宅で、私は自活の目処が立つまで厄介になることを許容したのだ。

あくまで、それは王宮で妹と暮らすことを避けるための、せめてもの代案としてだった。
そうなると嫌でも、ゲーム上の今後を考えざるを得ない。
今の自分が暮らすのは、アンジェス国イデオン公爵邸。
となると、私が歩んでいるのは間違いなく〝エドヴァルドルート〟だろう。
元々アンジェス国パートのシナリオは恋愛が少なく、戦略シミュレーションゲームとしての趣が強い。
それゆえ美形キャラとの恋愛を楽しみたい女子の多くは、より恋愛要素の強い別の国――ギーレンかバリエンダールからスタートしていたはずだ。
アンジェス国で展開していく物語は、隣国であるギーレンからの侵略、あるいは〝扉の守護者〟の略奪を阻止することがメインになっている。
だからバッドエンドは必然的に国の滅亡による上層部の処刑、あるいは宰相の暗殺によって国が滅亡するフラグが立つというシナリオになっている。
では今の私は、ゲームの時系列で言うところのどこに立っているのだろう。
イデオン公爵邸に招かれて最初に確認したのはそのことだった。
エドヴァルドルートのバッドエンドは二種類ある。
その分岐点になる事件の内、隣国ギーレンでの第一王子による婚約破棄事件は既に発生していた。
そのため、機密情報である〝転移扉〟の情報流出事件から派生するエドヴァルドの処刑エンドのシナリオは消滅していると判断できた。

けれど第一王子が王位継承権を失うことで、次期王太子として外遊に出ることになる第二王子エドベリが、滞在先であるアンジェス国の王宮で暗殺される可能性は残されている。
もしこのルートのまま進行すると、アンジェス国王の叔父レイフ殿下と、ギーレンでの復権を目論む元第一王子による二国同時の叛乱が勃発してしまう可能性がある。
そうなると、エドヴァルドが国を追われる途中で殺害されるバッドエンドにたどり着いてしまうかもしれないのだ。
エドヴァルドを失ってしまえば、聖女と共に王宮に縛り付けられるか、彼女とセットでレイフ殿下派閥のどこぞの有力貴族に囲い込まれかねない。
悪くすれば魔力なしの「聖女の姉」には価値もないとばかりに暗殺者を差し向けられるかもしれない。
いずれにせよ国王陛下が私の保護と教育をエドヴァルドに委ねた時点で、私の命運はエドヴァルドと共に動こうとしていたのだ。
とはいえ、今のままではシナリオを知ったところで舞菜は確実に何もしないだろう。なんとしても、私がエドヴァルドの死のシナリオを回避しなくてはならないのだ。
最初はもちろん私自身が死にたくないというところから始まった。けれど彼の邸宅で過ごすうちに、エドヴァルドも死なせたくないという気持ちが強くなっていった。
彼の処刑エンドが回避されたとして、ならばもう一つのバッドエンドである亡命・暗殺エンド阻止のため、これから私に何が出来るのか。

元いた世界に帰る術が見つからない以上は、今はそれを最優先に考える必要があった。
なのに。
（――帰さない）
「……っ！」
かつて、彼にそう囁かれたバルコニーに佇んでいたのがいけなかったのか、エドヴァルドに囁かれた言葉が脳裡にこだましてしまい、わちゃわちゃと両手を振ってしまう。
だいたい、そんなシナリオもスチルもゲームの中にはなかったのだ。
なかったはずなのに、実際には反則ぎみなバリトン声と共に、重なった唇の記憶までが甦ろうとしていて――
「――レイナ」
「ぴゃっ⁉」
まさか脳内こだまと現実とが一致すると思わず、うっかりおかしな声をあげてしまった。
気付けばベランダの向こうに立ったエドヴァルドが、ラフな格好でじっとこちらに視線を向けている。
「エ、エドヴァルド様……」
「眠れないのか」
「えっと……」
はいと答えても、違うと答えても、自分が不利になることが確定していそうで言葉に詰まる。

「いよいよアルノシュト伯爵夫妻が来ると思えば、ちょっと眠れなくて……」
困った私は、眠れないほどの悩みではなかったけれど、嘘ではないことを口にしてみた。
事実、現国王の叔父であるレイフ殿下は虎視眈々と叛乱の機会をうかがっている。明日やってくるアルノシュト伯爵夫妻はそんなレイフ殿下に抱き込まれて、彼に資金の提供を行っているようだ。
つまり、この国にいずれ起きる叛乱を防ぎ、エドヴァルドの命を救うためには、彼らをやりこめる必要がある。
アルノシュト領は無理な鉱山開発によって、鉱毒を垂れ流しているという話も出たからには、彼らを罰する重要性はさらに高まっているのだけれど……
「あ、案外難しいですよね。アルノシュト伯爵だけをやりこめて、領内の産業の価値は下げすぎず、経済的な体力をつけさせるっていうのは――――」
「――レイナ」
「……はい」
エドヴァルドに名前を呼ばれ、あえなく言葉を区切る。
どうやら悩んでいたのはそこじゃない、というのはバレバレだったようだ。
「一人でアルノシュト伯の瑕疵を問おうとしなくていい。そもそもこの問題は、一朝一夕でどうにかなるものではない。この件で貴女を王宮の聖女のところに戻すような真似は誓ってしない。……だから」
そこで少しだけ、間が空いた。

夜空に同化しそうな群青の瞳が、こちらを射貫く。
「公爵邸にいてくれ。私は決して召喚をした罪悪感で貴女を望んでいるわけではないんだ。覚えておいてくれ。明日、いや、これからも、私は貴女のすぐ傍にいるのだということを」
夜が明ければ、アルノシュト伯爵夫妻がいよいよ領地の報告にやってくる。昨日、私一人で対峙したのとは違い、エドヴァルドが隣に立つ。
彼らが難敵だというのはよく分かっている。貴族社会に慣れた彼らはのらりくらりとこちらの言葉を躱す術を知っているのだ。
そんな彼らと相対する不安があった。だから嘘はついていない。けれど本当に不安だったのは、そのことじゃなかった。
この邸宅の居心地の良さと、私を選び、傍にいると言ってはばからないエドヴァルドの言葉を信じていいのかという疑念。
そして舞菜じゃなく「恰菜」だけを見てくれる人間などどうせいないのだからと、一人で異世界を生き抜く術を模索していた、その計画と決意が揺らぐことへの恐怖だ。
私の心にそんな波紋を広げた張本人に向かって、不安定な己の内心を吐露する気には、今はなれなかった。
「もしまだ眠れないと言うのなら、このベランダをまた乗り越えて、添い寝に行くが」
「……っ!?」
隣室のベランダに立ち、こちらを見つめるエドヴァルドの瞳の奥にわずかな本気の色を垣間見て、

私は思わずブンブンと首を横に振った。
「寝ます、寝ます！」
「そうか……残念だな」
面白そうに笑わないでください、宰相閣下！
ゲーム設定の「冷徹鉄壁キャラ」はどこにいったんですか――!?

第一章　視覚の暴力に立ち向かえ

その翌日。昨晩のやり取りなどなかったように、私たちは互いに声をかけあい、支度をしてアルノシュト伯爵夫妻を迎え撃ちに玄関へと向かった。

個性の強い貴族の奥様と聞いて、勝手にポンパドゥール夫人のような姿を想像していた私に、知識不足な面があったことは否めない。

けれど、アルノシュト伯爵夫人は、そんな私の想像の斜め上をいく奥様だった。

ポンパドゥール夫人は「侯爵夫人」だとか、国王陛下（フィルバート）にはルイ15世のような公妾（めかけ）がいないとか、そういうことでもなく――単に、視覚として。

「……ナ、レイナ。気持ちは分かるが、そこで固まらないでくれ」

階段を下りる寸前、エドヴァルドからそう囁かれて、ようやく我に返る。

「……エドヴァルド様」

「ああ」

「ドレス、ヘルマンさんにお願いしていただいて、本当に、本っ当に、よかったです」

「……そうか」

本当に、を強調する私にエドヴァルドが苦笑している。

恐らく、階下にいた伯爵夫人からもそんなエドヴァルドの苦笑する姿が見えたのだろう。

まぁ……と、声が洩れ出ているのが聞こえた。

鉄壁無表情がデフォルトの宰相閣下が自分から私の方へと顔を寄せた上に、私の答えに微笑（わら）って言葉を返すその姿は、もはやバカップルのイチャイチャだったと気付いたのは後になってからだった。さらには侍女さん達がイイ笑顔で親指立てていたのにも、気付けなかった。

要はそのくらいの衝撃が、私の頭の中を駆け巡ってました。はい。

――トカゲとロリータ。

視界が一瞬、認識を拒否した。

伯爵夫人、確か私の倍のご年齢でしたよね？

トゥーラ・オルセン侯爵令嬢の姫系ドレスも大概でしたけど、さらにピンクとリボンとレースに拍車がかかって、ヘッドドレスまで付いての、ロリータ衣装ですか⁉

夫人単体で言えば、似合っていないわけではない。

彼女は割と柔らかい印象の女性で、ヤンキー少女との友情物語の映画で「ロリータちゃん」だった女優さん的なイメージが、無きにしもあらずだ。

ただ、そんな彼女が、無表情かつ爬虫類っぽい顔つきのアルノシュト伯爵の隣に立った瞬間に、それはもう、ただただ、視覚の暴力になってしまったというだけの話。

頼んだ「マダム・カルロッテ」の衣装は、本当に大丈夫だろうかと不安になってしまう。

とはいえ、今から戦う本命は、トカゲ伯爵（アルノシュト）のほうなので、慌てて彼女から視線を引きはがして微

笑みを作る。
エドヴァルドも同様に酷薄とも言える笑みを浮かべて、二人を見下ろした。
「伯爵も夫人も、息災なようで何よりだ。報告書は昨夜彼女より預かっている。話は団欒の間でさせてもらおう」
エドヴァルドに玄関ホールで雑談をするつもりは欠片もないらしい。
宰相閣下の鉄壁無表情を分けてほしいと、切実に思った。
さあ、そのまま団欒の間へ――、と身体を動かそうとした時だった。
「まぁ公爵様、お隣の美しいお嬢様を私にご紹介くださいませんの？」
「……っ！」
甘ったるい伯爵夫人の声がかけられる。その声を聞いた瞬間、小さく息を呑み込んで、エドヴァルドに添えていた手に力を入れてしまう。
そんな動作に気が付いたのだろう。
「下りるぞ」
私を気遣うような小さなエドヴァルドの囁きに、私はなんとか内心を立て直そうと、コクリと頷いた。
それでもざわついた心は収まっていない。
鼻にかかったような甘ったるい話し方に、嫌悪感が先立つのはもはや条件反射だ。
衣装の傾向もそうだけど、色々な意味で、きっと舞菜が二十年たったらああなる。

あざとさは無意識。呼吸と同じレベルで異性の庇護欲を刺激する姿に既視感しかなかった。
頑張れ私、と自分自身に言い聞かせる。
大丈夫。
アレは舞菜じゃない。
何よりここで怯んでいては、公爵家の皆さんの期待に背いてしまう。
小さく深呼吸をして、エドヴァルドと共に歩を進める。
「……伯爵から話はあったと思うが」
すると途中の踊り場まで階段を下りたところで、エドヴァルドが一度足を止めて口を開いた。
「彼女が当代〝扉の守護者〟の姉、レイナ・ソガワ嬢だ。国が妹の補佐にと請うた賓客であり、陛下からの命で滞在してもらったが……あまりに優秀なので、私がこの邸宅の内向きのことも担ってもらいたいと、二階の私の隣の部屋への滞在を、切にお願いした」
そう言って口元を綻ばせたエドヴァルドの姿に、誰もが驚いて口を挟めずにいる。
「ああ、もちろん夫人の仰る通り、この美しさも理由の一端ではあるな」
いやあっ⁉
目の前で、しれっと歯が浮くようなことを言ってる人って誰ですか⁉
ホントに、女避け必要でした⁉
自分でなんとでも出来たんじゃ……！
内心嵐どころか暴風雨に変じたところに、バッチリとアルノシュト伯爵夫人と視線が合ってしま

い、我に返った。
ダメだダメだ。ヨンナ直伝の〝深窓の令嬢のご挨拶〟を、ここで披露しないでいつするって話。
一度、エドヴァルドと視線を絡ませて、許可を得た体をとってから、ドレスの両端を軽く摘む。
「初めまして、アルノシュト伯爵夫人。レイナ・ソガワと申します。妹の補佐にと請われこちらの国へと参りました。ですが国の保護下にある妹と異なり、寄る辺なく不安にしておりましたところ、エドヴァルド様が手を差し伸べてくださいまして……現在では大変に、良くしていただいております」
エドヴァルドの微かな動揺が、再び組んだ腕越しに伝わる。
なんですか。嘘は言ってないですよ？　物は言いようです。
ちらりと視線を向けると私の言わんとしたことを察したのか、一瞬の動揺すらなかったものとしたエドヴァルドが、アルノシュト伯爵夫人が何かを言いかけるよりも先に私の言葉を継いだ。
「……無理を言って来てもらったのだから、当然だ。だが今となっては陛下の命などなくとも、私はこの邸宅で貴女を守るつもりだ。もはや義務ではない。そのことを皆に周知させるべく、貴女には二階への滞在を願っている」
そう言って前を向いたエドヴァルドは、それ以上は誰の言葉を待つこともなく、私の腕を引いて残りの階段を下り始めた。
伯爵夫人が目を丸くしているところから言っても、その場しのぎの嘘を言っているようには見えないのだろう。

「公爵様……本当に今年は、縁談はご不要ですかしら？」
階段を下りきったエドヴァルドは、そのまま歩いていたものの、そんな夫人の声に一度だけ足を止める。
「そもそも毎年必要としていないが。それでも、私がいかに彼女を大切に思っているか理解いただけたようなら、以降は他をあたってもらいたい」
そう冷ややかに言い置いてからこちらへと向けられた微笑みに、冷徹宰相との乖離が半端ないと、私は思わず息を呑んだ。
果たしてこれほどのキラキラなスチルが〝蘇芳戦記〟の中にあっただろうか。
さすがのアルノシュト伯爵夫人も、それ以上何も言えなくなってしまったようだ。
多分、この手の人は容易に引かないとは思うけど、初戦は取ったってことで……いいんだよね？
トカゲ伯爵様が、色々と諦めた表情なのはなんとも言えないけど……
それって、誰の、何を、諦めたの？　ねぇ？
団欒の間に着くと、エドヴァルドは書類片手にあくまでさりげなく、話の口火を切った。
「さて、あまり事細かに領の運営に口を出すつもりはないが……昨日レイナ嬢から話を受け取った範囲だと、特に他領の商会に銀の先買権を譲渡したのは気になるな。なぜ自領の商会にしなかった？　他領に先買権を譲るほど困窮しているのならばこちらも対処に動くが」
「……っ」

エドヴァルドが突いたのは、アルノシュト伯爵家がレイフ殿下に与して国への叛逆に加担するのではないかとの疑惑についてだ。
もちろんあからさまにそんなことは言っていない。ただの仄めかしだ。
そんなエドヴァルドの言葉にアルノシュト伯爵は一瞬だけ表情を揺らがせ、それからすぐに彼は立ち直った。
このあたり、狼狽を隠せていなかったオルセン侯爵とは器の違いを感じる。
「申し訳ございません。妻の実家絡みでしたもので、他領という印象が薄かったのでございます。それに、近い内に坑道の掘削を少し奥まで進めたく、鉱山労働者の環境を整える必要もありましたので、配給する食糧や薬が例年より多く必要だったのです」
鉱山での労働自体、ハードな肉体労働であると同時に、坑内での石の粉や煙を遠因とした呼吸器疾患の危険性を、常に抱えている。
一人一人が長時間労働にならないようにするため、当然作業は交代制だ。さらにそれぞれに、交代待機の間の補償も必要となる。
それを食料や薬の配給で賄っているのであれば、確かに一定の備蓄は必要だろう。
「備蓄が増えているのは、そのせいと言う訳だな」
エドヴァルドも、そこは納得したように頷いている。
その頷きに、アルノシュト伯爵は少しホッとしているように見えた。
「掘り進めた坑道が安定しましたら、次年度は先買権を譲渡するようなこともないかと存じます」

これ以上エドヴァルドに詮索をされないためには、当面先買させる銀の量を、理由なしに増やす訳にはいかない。これで「来年はそれほど資金提供が出来ない」という一言が、アルノシュト伯爵側からレイフ殿下側に、裏で流れるだろう。
叛乱には金銭も、物資も大量に必要だ。多少なりと彼らへの牽制にはなるはずだ。
――今出来るのは、ここまでじゃないかと思う。
そんな私の視線を受けて、エドヴァルドが諦めたように短く息をついた。
「いいだろう、承知した。アルノシュトからの情報は気にかけておくようにするから、問題が生じるようなら、すぐさま使者を立てろ。坑道を掘り進めるとなると、落盤事故や掘削で出る屑石の処理などでも、対処に困ることが出てくる可能性もあるからな」
「は……ご配慮誠に有難く……」
恐らくは去年まで言われなかったことを言われたであろう、アルノシュト伯爵の目が泳いでいる。爬虫類顔で目がせわしなく動いているのは、ちょっと、いや、かなり不気味。
多分、と言うか間違いなく、現段階で既に、夫人の故郷でありレイフ殿下の直轄領であるブラード領の商会が手配した労働者が銀山に流入して、周辺の村で起きている事故報告等を握り潰している。残念ながらまだ、証拠はないのだけれど。
この場では、次はないと仄めかせておくぐらいのことがせいぜいだろう。
「去年までも、気にかけているつもりではあったが、鉱山に関しては、私よりも彼女の方が余程詳しかった。私も色々と学ばされた。伯爵も、何かあれば彼女にまず意見を聞いた方がいいかもしれ

んと思った程だ」
……エドヴァルドの言葉であちこち動いていたアルノシュト伯爵の目が、一瞬で私の方に寄ったのは、さらに不気味。
とりあえず、困った時の扇頼みで、口元を覆いながら、ニッコリと微笑んでおく。
ホント、コレ便利だわぁ。
最初は使い慣れなくて四苦八苦したけど、だいぶ使い方が分かってきた。
「あまりハードルを上げないでくださいませ、エドヴァルド様。私は、目をかけていただいているお礼にと、元いた国で学んだ知識をお渡ししているだけですから」
「その謙虚さこそが、私がますます貴女を手放せなくなる理由でもあるのだがな」
「まあ」
扇の後ろで引きつった笑いを浮かべつつ、視線を下に向ける。
うん、まあ……長年、家族に対してやってきたことだから、小芝居は得意なんだけど。
なんだろう、そこに宰相閣下が加わることで、演目がとんでもなくグレードアップしている気がする。だけど仮にエドヴァルドのアンジェス追放フラグを叩き折ったとして、今年はいいにしても、来年も再来年もエドヴァルドは同じ小芝居で見合い攻撃をぶった切るつもりなんだろうか。
とりあえず、今この場を凌げればそれでいいということか。
実際アルノシュト伯爵はそんな小芝居に踊らされてくれたようで、ハンカチを汗で拭って首を横に振っている。

「確かに……昨日少し話をさせていただいただけでも、色々と内政にお詳しくていらっしゃって、私も驚きを隠せませんでした。随分優秀でいらっしゃる」
どうやらアルノシュト伯爵は、仄めかされている領地への疑念を全力で無視して、当たり障りのない会話をすることに決めたみたいだったけれど、そこで話を明後日の方向に思い切り捻じ曲げたのが、お隣の〝ロリータ衣装〟奥様だった。
「でも、それほど優秀で公爵様の執務を手伝われるようなお嬢様でしたら、社交方面で後々、お困りになられるのではございませんこと？」
こてりと首を倒して、愛らしく聞いてくる姿に思わず遠い目になる。
夫への追及をかわすために出た言葉と取れなくもないけれど、後で聞いたところによると、アルノシュト伯爵夫人カロリーヌの空気の読まなさっぷりは毎度のことで、こうして夫である伯爵の話をぶっちぎってしまうのもしょっちゅうらしい。
ふわふわと袖のレースを揺らしながら、夫人は私たちの沈黙をものともせずに言葉を続ける。
「公爵様ほどのお方であれば、もうお一方社交に長けた方をお傍に置かれても宜しいのでは？　こちら、皆さま名家のお嬢様方ですから、複数の妻を持つことにも、理解のある方たちばかりでしてよ？」
「善意」全開といった表情で夫人はエドヴァルドに視線を向けているし、いつの間にやら定例の報告書類以外の、まるで身上書のような書類が重ねて並べられている。
この話の聞かなさと、あくまで善意に見せかけるのが舞菜そっくりだ、と思っていると、エド

ヴァルドが微笑んで（いや、目は笑っていない気がする）、夫人の言葉を一刀両断した。
「必要ない。最初から政略結婚と理解して正室を迎えるなら、それぞれのメリットに応じて公妾として二人三人とさらに迎える選択肢もあったかもしれんが、己の『唯一』を見つけてしまった以上、そんな選択肢はもはや意味を為さない。少なくとも彼女に、そのように手当たり次第な不実な男と思われるのは許容出来ない」
いやいや！
一見イイコト言ってますけど、前半はなかなかに鬼畜ですよ、宰相閣下。
そこに愛はあるのか――なんてCMがあった気もするけど、まさにそれ。
思わず顔が痙攣った私に、エドヴァルドが「ご覧の通り」と、苦笑を見せる。
「彼女が側室の存在を厭っている以上、私は彼女を尊重する。まあ、もともと許しがあったところで側室を迎えようとも思わないが」
私の表情まで使った反駁は見事の一言に尽きるのだけれど、さすが婚活のラスボスは一筋縄ではいかなかった。
夫人がくるりとこちらに微笑みを向ける。
「レイナ嬢？　レイナ嬢も、公爵様にはご実家の後ろ盾があって、社交界から夫を支えられるご令嬢がどなたかいらっしゃった方がお心強いですわよね？　こちらの国に来られたばかりでは、心細い面も多くおありでしょう？」
一見すると、裏表なく「エドヴァルドのため」「私のため」を会話に滲ませながらの「善意の提

案」だ。
多分、本人は心の底からそう思っているのだろうし、相手の望まぬことを押し付けている自覚もない。
だけどこれは、「あなたのためなのよ」と言いながら、望まぬ進路や縁談を押し付けてくる毒親のやりようとなんら変わらない。
夫人は、言われた側の意見は求めておらず、感謝して受け入れられることが当然と思っている。
エドヴァルドが視線どころか全身で「拒否しろ」と私に訴えていることなど、夫人の視界からは都合よく消されているのだ。
部屋の空気、温度が冷え込んできていることは気のせいじゃないと思うんだけど。夫人は笑顔で無視だ。
ええ、はい、分かってますってば、宰相閣下。
その前半の鬼畜な発言部分は、ちゃんと聞かなかったことにしておきますから。
とりあえず何かフォローしろってコトですよね？
ちゃんと仕事しますよ？　――主に扇が。
「伯爵夫人、お心遣いは大変に有難いのですけれど……私は心が狭うございますので、この国の社交界に伝手がない心細さよりも、エドヴァルド様の目が私以外の方に向くほうが耐えられませんわ。何よりこの国に来る時に、エドヴァルド様は私のことを必ずお守りくださると、お約束いただきました。それは、他の女性と並列に扱われることではないと思っておりますの」

……とはいえ、何事にも限度、限界はあるワケで。
これ以上歯の浮くようなことは、もう私には言えません。
ですがレイナ嬢――と、なおも夫人が言い募りかけたところで、私は扇越しにニッコリと笑って、それを遮ることにした。
扇の力を借りても、ここが限界です、宰相閣下！　何とぞご理解を……！
もうエドヴァルドに丸投げしようと思ったその時、何気なく、本当に何気なく、机に広げられていた釣書の山に視線がいった。
……あれ？
浮かんだ疑問を解消するため、なんとか最後の気力を振り絞って私は扇越しに視線を夫人の方へと向けた。
「アルノシュト伯爵夫人」
「――どうかなさいまして？」
不満そうな素振りは見せずに微笑み返すところは、夫人も流石だと思う。
うん。
気合再び、頑張れ私。
トカゲとロリータちゃんの衝撃に、あとちょっと耐えろ。
「夫人がお持ちになられた釣書ですけれど――」
「ええ、皆さま素晴らしい方ばかりでしてよ？」

私の言葉に喰い込みぎみに夫人が答えるものだから、一瞬エドヴァルドの目が据わった。
いやいや話は最後まで聞きましょう、お二人とも？　私はここから誰を選ぶとも言ってませんよ？
それよりも、聞きたいことが出来ただけです。
私は誰の目にも分かるように、視線だけを机の上へと落とした。
「シャルリーヌ・ボードリエ伯爵令嬢……でしたかしら？　この方はいつ、ギーレン国からこちらにお越しになられたんですの？」
「……え？」
私の一見無邪気な質問に、夫人の表情から笑顔が抜け落ちた。
見ればトカゲ伯爵様も、幽霊を見ているような表情になっている。
失礼な。
それにしても、驚くほどに反応が顕著だ。
もう一押しするべく、今度は扇の後ろで首を傾げて、釣書の一枚を指さして見せる。
「確か、ギーレン国のベクレル伯爵家所縁の方ですわよね？」
「そ……れは……」
「先ほど、こちらの方々はご実家の後ろ盾があり、社交界から夫を支えられる令嬢、とのお話でしたけど――」
私がそこまで言いかけたところで、青ざめた表情のアルノシュト伯爵が、テーブルの上にあった

ご令嬢方の釣書を慌ててかき集めて、夫人の手の中に押し戻した。
「さ、もういいだろう、カロリーヌ」
「旦那様、ですが……」
「さすが公爵様がお選びになられたご令嬢。我々では歯も立たない――そういうことだ。申し訳ありません、公爵様。この釣書は忘れてください」
「……もとより興味もなかった物だ。残らず持ち帰ってもらって構わない」
視線はアルノシュト伯爵の方を向いてはいても、エドヴァルドを纏う空気は完全に「後で説明しろ」と、私に突き刺さっている。
ひぃっ!?　しかも冷気が増してるし！
だって、さっき釣書を夫人がわざとらしく何枚か開けて、机に置いたところで気が付いたんだから、事前に説明できなくたって仕方がないと思うの！
それからすぐに這々の体で公爵邸を後にするアルノシュト伯爵夫妻を見送る。
「つ……疲れた……視覚の暴力だと思う、あれ……」
気が抜けて玄関ホールに崩れ落ちかけたけれど、私の右腕を掴んだエドヴァルドがかろうじてそれを阻止してくれた。
レイナ様素晴らしゅうございました！　とか、こんなに短時間で話が済んだのは初めてです！とか、音が出ないように拍手してみせる使用人一同を横目に、エドヴァルドの表情は厳しかった。
「助かった、と言いたいところだが手放しでは喜べないのも確かだ。言いたいことは分かるな」

「あー……そうですね、ハイ」
「セルヴァン、団欒の間の書類を纏め直して書斎へ。私はレイナと先に話を始めている」
「かしこまりました、旦那様」
無言でこちらを見てくるエドヴァルドに、危険を察知した私は慌てて立ち上がった。
「ええ、大丈夫です！　歩けます！　一人で書斎まで行けます！」
「……」
かろうじてお姫様抱っこは回避出来たものの、私の右腕を掴んでいた力は、緩まない。
今日も今日とて、私は書斎に連行されることになった。
蘇る「ソファドン」の記憶に身を強張らせると、私の腕を放したエドヴァルドがため息をついた。
「……この格好で余計なことはしないから、普通に座っていろ」
確かに今着ている服は、お互いに、気楽な室内用の服ではない。
あんなことをしていては、皺が寄って公の場に出られなくなる。
それもそうだと納得して、私は書斎の応接用ソファ、エドヴァルドの向かいに腰を下ろした。
「それで？　シャルリーヌ・ボードリエ伯爵令嬢、だったか。その名前で何故、アルノシュト伯爵夫妻があんなにも顔色を変えた。正直あれがなければ、まだまだ居座られるところだっただろう」
片手をソファの背もたれに置き、足を組んでじっとこちらを見てくるエドヴァルドに、私も慌てて両手を横に振る。
「いや、隠していた訳じゃないんです！　あの釣書が机の上に広げられて、名前と絵姿を見たから

こそ、思い出したと言うか……」
「何を」
「そのご令嬢、ギーレン国でパトリック元第一王子に最初に婚約破棄をされたシャルリーヌ・ベクレル伯爵令嬢と同一人物のはずです」
「……っ」
私の爆弾発言に、流石のエドヴァルドも、小さく息を呑んだ。
シャルリーヌ・ベクレル伯爵令嬢。
今は、シャルリーヌ・ボードリエ伯爵令嬢か。
彼女こそ〝蘇芳戦記〟をギーレン側から始めた場合の、正当なる主人公（ヒロイン）だ。
ゲームのシナリオでは、婚約破棄をされた後にエドベリ第二王子の攻略に入るか、修道院に追いやられるか……という流れになるはずだ。
エドベリ第二王子の攻略ルートに入る場合は、婚約破棄事件のほとぼりが冷めるまで、ヒロインは国外へ出る。ボードリエ伯爵家とベクレル伯爵家とは親戚関係にあったから、そこで養女となってヒロインの家名が変わるのだ。
そしてエドベリ第二王子がアンジェスに外遊に来た際に二人は再会し、婚約破棄のショックに耐えながら、他国で健気に生きるシャルリーヌを見たエドベリ第二王子が彼女に求婚する――のがハピエンまでの流れだったはずだ。
ボードリエ伯爵家はアンジェス国ではレイフ殿下の派閥貴族だ。そのため、彼らによる叛乱騒ぎが起きることでアンジェスでも居場所を失いかけるシャルリーヌを、エドベリ第二王子がそのままにしておけなかったのだ、という理由付けもされていたはずだ。
「経緯は分かりませんよ？　婚約破棄をされてギーレン国内で居場所がなくなって、本人に瑕疵（かし）はないのに、修道院はあんまりだろうって、ボードリエ家に養女に出されたのかなぁ……とかは、勝手な想像ですよ？　ただボードリエ伯爵家も、今のところはレイフ殿下派閥のはずですから、裏がないとは思えなくて。つい口を挟んじゃいました、すみません」
本当は「しれっと誰の釣書を混ぜているんだ」と、言いたいくらいだった。
もっとも、あれだけ慌てふためいて退散したことを思えば、彼女との縁組を推し進めて、エドヴァルドをレイフ殿下の派閥に取り込みたいという意図は確かにあったんだろう。
だけど実際にそれを実行されると現在主人公――シャルリーヌが進んでいるであろう〝エドベリルート〟が破綻してしまいかねない。
一見シャルリーヌのルート選びは〝エドヴァルドルート〟と無関係のように思える。けれど、王子とヒロインがくっつかないとなれば、ヒロインを王子に紹介出来ず、エドベリ王子に売れる恩が一つ減ってしまう。
そうすると、エドヴァルドがギーレンに亡命せざるを得なくなった場合に頼る先が一つ減りかねない。私が一番避けたいのは、エドヴァルドの失脚と死だ。なのでそれを阻止するために口を挟ませてもらったのだ。
そしてアルノシュト伯爵は伯爵で、ボードストレーム商会との繋がりを知られ、レイフ殿下への

資金提供の調達が封じ込められたも同然の状態になったために、縁組の利よりも、献金から叛乱の計画に辿り着かれるリスクを回避するほうを選んだに違いない。
それを知らなかった夫人だけが、話題に取り残されたのだ。
つくづくトカゲ……ごほん、アルノシュト伯爵の危機回避能力の高さに舌打ちしたい気分だ。
出来れば主人公（ヒロイン）サマには、アンジェス側のシナリオを引っ掻き回すことなく、ギーレン側でハピエン王道ルートを驀進してもらいたい。
シナリオを外れそうな、危なそうなフラグは事前に叩き折る。
これ鉄則。
とはいえ説明をしてなお、それだけじゃないだろうとばかりに、じとっとした視線でこちらを見つめてくるエドヴァルドに対して、私は所在なさげに首を縮こまらせる。
「ええっと……シャルリーヌ嬢が実際にエドヴァルド様をどう思っているのかは、分かりませんよ？　ただレイフ殿下派閥の視点から考えれば、なんとしてもエドヴァルド様にフィルバート陛下からは離れてもらいたいでしょうから――」
流石に今の段階でギーレン側の物語についてまで口にするつもりはないので、あくまでレイフ殿下側の視点で考えた場合のことだと仄（ほの）めかせておく。
「馬鹿馬鹿しい」
するとレイフ殿下の名前を前に出したのが功を奏したのだろうか。
それとも私が自分の意図を隠したことには気付かなかったのか、あるいはあえて触れなかったのか。
エドヴァルドは、私が口にした部分だけを掬い上げてそれを一刀両断した。
「まあしかし、あれほど慌てふためいて帰って行ったのなら、その話もあながち穿（うが）ちすぎとはいえないんだろうな」
「……私が、エドヴァルド様の周りが物騒になるって言った話、分かっていただけますか？」
究極の目的はアナタの亡命暗殺エンドの阻止です、だなんて今の時点で言えるはずもないけれど、とにかく真面目な声と表情でエドヴァルドを見つめれば、彼もそれ以上私を怪しむことはなかった。
「……既に兆しはある、か」
「何もかも、エドベリ第二王子の外遊と切り離せることじゃないので、公爵邸（ていてい）から可能な限りの助力はします。――絶対に宰相室には行きませんけど」
邸宅にある執務室、ではなく宰相室、と言った意味はエドヴァルドに正しく伝わったようで、すぐに頷きが返ってきた。
要は王宮に行きたくないのだ。
国として、聖者から聖女への〝扉の守護者（ゲートキーパー）〟の交代が布告された以上、他国からの賓客が訪れた際には、一度は挨拶を兼ねた顔合わせをしておかなくてはならない。それは聖女の姉として招かれた私にも当てはまり、公的な式典あるいは夜会に最低でも一度は顔を出さなくてはならないだろう。
無駄飯喰らいの居候扱いから脱却するため、助力をすること自体はやぶさかではない。ただそれでも、真に必要になるまで、王宮に足を踏み入れるつもりは一切なかった。

他の何に協力してもいいけれど、それだけは譲れない。
舞菜はまだ、私がこの国の文字や歴史を一から学ぶのに、手いっぱいになっていると思っているだろう。
私がこのアンジェス国で平穏無事に――舞菜と関わらずに過ごすためには、妹に「誰からも愛される自分と違い、姉は毎日苦労している」と思わせておかねばならないのだ。
姉の不幸こそが妹の幸福。だから実際の進捗状況は、隠し通す。
「とりあえず、午後はハルヴァラ伯爵夫人とお会いして、現在の領地の状況を確認しますね。アルノシュト伯爵を引きずり下ろす話は、それはそれで進めたいと思っているので」
どこまで私の勉強が捗っているか……などと、イデオン公爵邸の外に悟られてはいけない。
口にはしなかったけど、視線で私の真意は伝わっただろう。
――すまない、とエドヴァルドの唇が微かに動いた気がした。
それはきっと、ハルヴァラ領のことについての謝罪ではなかったはずだ。

第二章　脳筋侯爵と未亡人の事情

イデオン公爵領下において、当主である公爵に対し税収、納税を中心とした、領地に関する定例報告の義務を負っているのは十二人だと、セルヴァンからは聞いた。
村長は町長に、町長は男爵あるいは子爵に、男爵あるいは子爵は、伯爵あるいは侯爵へと報告を上げ、最終的には九人の伯爵と三人の侯爵が公爵へ報告を行っているそうだ。
ちなみにイデオン公爵領は、国に五人いる公爵の中で、持つ領土の広さとしては下から二番目ということになるらしい。ただ、イデオン公爵領は王都、三つの公爵領、王家直轄領、ギーレン国に面しているため、国内で最も戦略的な要衝であると言ってもよく、毎年の報告は、おざなりにされるべきものではないのだという。
〝蘇芳戦記〟では説明文程度の話だったはずだけど、今のこの現実世界に当てはめて考えてみた時に、果たしてエドヴァルドは自らが治める地を捨ててギーレンに亡命することを潔しとするのだろうか。
そんなことをするくらいなら、黙って断頭台の露と消えることを、選択しそうな気がして仕方がない。
それにゲーム上ではアルノシュト伯爵家だけだったとはいえ、他にレイフ殿下の派閥下に取り込

まれた家は本当にないのか。
エドヴァルドは私が大学あるいは卒業後に目指していたことと近いだろうからと、報告に立ち会うことを勧めてくれたけれど、私としては亡命暗殺エンド回避のために、エドヴァルドの敵に回らない領主を見極める必要があるように思えた。
とはいえアルノシュト伯爵夫妻から受けた精神的なダメージがあまりに大きくて、あと九人も来るのか……と、一瞬遠い目になってしまう。ただ、そうは言っても毎年、家計簿のような物を家令が送ってくるだけの侯爵家があったり、隣の領地に報告を預けてしまう場合があったり、家族に不幸があって延期を求めている場合があったり……と、毎年十二人きっちりとやってくることは、まずないらしい。
つまりは今回、やってくるのはあと数人ではないかというのが、セルヴァンの見立てだった。
「既に、少し時間をいただきたいという伯爵領なんかもありますしね」
「……なるほど」
全員と会えないかもしれないというのはちょっと残念だけれど、そうそうこちらの都合に合わせて物事は進まない。そこは仕方がないと思うよりほかはなかった。
アルノシュト伯爵夫妻が挨拶もそこそこに邸宅を後にした後、エドヴァルドは最近すっかり昼食として定着したらしいサンドイッチ持参で王宮に出仕していった。
私はダイニングで一人食後の紅茶を飲みながら、セルヴァンに毎年の定例報告に関するあれやこれやを教えてもらう。

この後、午後の半ばにハルヴァラ伯爵領から定例報告の担当者が邸宅（やしき）を訪れる予定だ。
既に「書類を持参する」と先触れのあったこの領地は、昨年領主が急な病で帰らぬ人となったそうで、今年はまだ六歳だという長男ミカ君と、長男の成人まで伯爵代理となるイリナ夫人、そして夫人の実父であるコヴァネン子爵が付き添いで来るとのことだった。
きちんとした先触れが行われたことによって、個人的に評価は高い。
そしてハルヴァラ伯爵領はアルノシュト伯爵領と隣り合った領地だ。私としては、表立ってでなくとも構わないので、アルノシュト伯爵家を横から牽制出来るような家であってくれれば嬉しいのだけれど。
ただセルヴァンは、ハルヴァラ領に対してなにか思うところがあるらしく、慎重に言葉を選びながらこちらを見やった。
「レイナ様、少々問題と言いますか……領内では夫人が代理となられることへの不安、もしくは不安と称した後見争いが密かに起きているとの話がございます。もしかするとこの訪問、一筋縄ではいかないかもしれません」
「えぇ……ささっと白磁の話をさせてほしいんだけどなぁ……。や、でも、そのイリナ夫人？　がダメダメな感じだと、そもそも話も持ちかけられないし……そこのところどうなのかな……？」
「亡くなられたハルヴァラ伯爵様は、穏やかで私欲をほとんど表に出さない方でした。毎年堅実な報告をなさっていらっしゃいましたが……」
夫人までセットでやってきたアルノシュト伯爵家と違って、ハルヴァラ伯爵夫人は王都までは来

ても、エドヴァルドの屋敷にまで連れ立って押しかけてくることはなかったらしい。
「まだご長男お一人だけでしたから、娘を旦那様へ……とか、邪な発想を持ちようもなかったんでしょう。私もお会いしたことがございませんので、今年実際にどう出られるかまでは、こちらも測りかねているのが実情でございます」
いやいや長男が六歳で、その後もし娘が出来たとしても、その「邪な発想」はエドヴァルドがロリコンじゃなきゃ成り立たない。
想像しかけてすぐ、気のせいか物凄い冷気を感じて、一瞬身を振るわせた。
やめよう、うん、考えただけでも後が怖い。
ハルヴァラ伯爵家に娘がいなくてよかったと思うことにしよう。
「あー……でもそれなら、夫人本人、なんて発想が出てくる……？」
「レイナ様？」
「ううん、なんでもない。いや、誰も当人を知らないなら、事前にあれこれ思い悩んでも仕方がないよね。本人を見てから判断するね」
「宜しくお願い致します。私もお傍に控えておりますので、何か気になることがございましたら遠慮なくお申し付けください」
「ありがとう、よろしく。あ、この場合は私の方から声をかけてもいいのかな？」
「左様でございますね。レイナ様も夫人も、お互いに『代理』を名乗られる身。であれば、公爵家であるこちらに優先権があるということで宜しいかと。付き添いの方は、基本的にはこちらの会話

に口を挟める立場ではございません。あくまで『付き添い』ですので、たとえ子爵様といえど、必要以上に遜る必要もないかと存じます」
それは、その子爵がアレコレ口出しをしてきても、取り合わずとも良いと言うことデスネ。
にこやかに微笑むセルヴァンから暗に示された言葉を、私は正確に理解した。
かしこまりました、頑張ります。
そうこうしているうちに、表門の方に馬車が到着したとの知らせが入り、私は玄関ホールの方へと移動をすることにした。
「む……？」
玄関ホールに入ってきたのは四人だ。
さっきまでのロリータ衣装に比べれば心が癒されんばかりの、ブラウンのAラインに長袖の上品なドレスがまず視界に入る。
あれがイリナ・ハルヴァラ伯爵夫人なのだろう。彼女に手を引かれて歩いているのが、きっと長男のミカ君。母子ともにミルクティー色のストレートな髪に天使の輪っかがリアルに見える。
なんて羨ましい髪質。
その後ろの生え際が寂しい小柄な男性がコヴァネン子爵で……あと一人は、護衛の青年といったところだろうか。
私を見て不審げに眉を顰めたコヴァネン子爵をあえて無視する形で、まず夫人の方に微笑んでみ

せた。
「遠路ご苦労様でございました、ハルヴァラ伯爵夫人。私、レイナ・ソガワと申しまして、当代〝扉の守護者〟マナ・ソガワの姉にございます。今は、エドヴァルド様からひとかたならぬご厚情を賜りまして、この邸宅において内向きのことを任せられ、二階の一室を頂戴しております」
「――――」
すると私の言葉を聞いたイリナ・ハルヴァラ伯爵夫人の瞳が揺れるのと同時に、背後に立つコヴァネン子爵の顔が、忌々しげに歪められた。
（おや）
オルセン侯爵と違って、私の言葉の意味は通じたみたいだ。
だけど同時に、ここに来るまで何かを企んでもいたことが分かる表情だった。
主に、後ろの子爵様が。
「どうぞ団欒の間へご案内致しますわ。書類はそちらでお預かりいたします」
「……ハッ、女が何を言うか」
そして表情のままの声が、玄関ホールに響き渡った。
――どうやらこちらの方は、残念なタイプのオジサンだったようです。
はぁ。と、私は聞こえるように溜息を溢した。
「本来でしたら、付き添いにすぎない方にこのようなことを申し上げる必要もございませんのですけれど……。私はエドヴァルド様から、不在の間の代理を務めるよう申しつかっております。彼の方が『内向きを任せる』と仰ってくださったのは、そういう意味も含んでおりましてよ？」
せいぜい、聞こえるような溜息をついて「付き添いのオジサン」を見れば、想像通りにプライドを刺激されたらしく、顔を赤くして身体を震わせていた。
なんだかハルヴァラ伯爵夫人が、目を見開いて私を凝視してますけど……口答えをしているの、それほど意外ですか？
なら、ダメ押しで。
「私の国では、男女関係なく政治経済について学べる環境がございますから、定例報告の書類であれば、問題なく拝見させていただけますわ。恐らくはそういったところも、エドヴァルド様に厚遇いただいている一因ではと思っておりますけれど」
「この……っ！」
そしてコヴァネン子爵の導火線は、想像以上に短かった。
前にいた娘と孫を突き飛ばすようにして、こちらへと突進してきたのだ。
「女は黙って男の言うことを聞いておればいいのだ！　生意気に公務に口なぞ出すでないわ！　だいたい、子爵であるこのワシに何たる口の聞き様か！　礼儀も知らんと言うなら、躾け直してやるわ!!」
「お父様!!　おやめください……っ」
「母上!?」
ハルヴァラ伯爵夫人が突き飛ばされるのを見たミカ君が悲鳴を上げる。

それにもかかわらずコヴァネン子爵は、おかまいなしに私の方に大股に近付いて来て、右手を大きく振り上げる。
平手打ちでもするつもりだろうか。
けれどその手は予想した通りに、最後まで振り下ろされることはなかった。
「……この人、オルセン侯爵より小物（ヒドイ）かも」
「あのなぁ、お嬢さん。今度からバカを挑発するなら、ひと声かけてくれるか。心臓に悪いわ。俺じゃなく、主にお館様の」
きっとセルヴァンが取り押さえてくれるだろうと思っていたのに、子爵の右手を捻り上げていたのがファルコだったのは、ちょっと予想外だったけれど。
あの……どこから現れたの、今？
深く詮索するのも怖いから聞かないまま、ファルコに向き直る。
「ごめんなさい、ファルコ。ちょっとこの人、この後話を聞くのに邪魔だったから、セルヴァンにつまみ出してもらおうと思ってたの。だから声かけとか、考えてなかった」
「それは申し訳ございませんでした、レイナ様。私（わたくし）としたことが、気の利かないことをしてしまいました。たまにはファルコにも、仕事をさせてやったほうがいいかと思いまして」
しれっと答える私とセルヴァンに、ファルコが呆れたような視線を向ける。
「勘弁しろよ、ホント……で？　このオッサン、マジでつまみ出すのか？」
離せだの、無礼者だのと、喚（わめ）き散らしている子爵サマを邸宅内の全員が無視した状態だ。

ハルヴァラ伯爵夫人は床に座り込んだ状態で、茫然とそんな私たちを見比べている。
これ、アレだよね……コヴァネン子爵の発言と、なんの躊躇いもなくこちらに手を上げようとした辺り、彼女が家庭内ＤＶを受けて逆らう気力を失くしちゃってるとか、そういった系だよね？
うーん……と、私はこめかみを揉み解した。
「ただ、館の外に放り出してもうるさそうだしね……とりあえず夫人から書類を預かって、話が終わるまでどこかに閉じ込めておいてもらえないかな？　その後、公爵邸で暴力を振るったってことで、警察？　憲兵？　そういったところに引き渡すとかでどうかな、セルヴァン？」
「そうですね……このような方ですが一応子爵位をお持ちですから、ちょっとそういった機関の腰は重いかもしれません。……今日はいったん『南の館』にお招きして、旦那様に宰相としての判断を仰がれたほうが宜しいのではないでしょうか」
一応って。
ああでも、貴族を裁くのは、貴族ということか。
確かに私は貴族社会に馴染みがない。そういったことなら、エドヴァルドに任せたほうがいいだろう。
「――いやいや、セルヴァン！　一見真っ当なこと言ってるけど、お嬢さんが殴られそうになったって言ったらお館様が激怒するのが目に見えてるぜ？　余計に重い処分になるんじゃねぇのか？」
「でしょうね。そもそも、どうして甘くする必要があります？」
「おお……密かにお怒りかよ、家令サマ……」

一人納得していたせいで、ファルコとセルヴァンがそんなことを呟いていたのには気が付かなかった。
「あ……そうそう」
ついでに軽い調子で夫人とミカ君の後ろにいた護衛を指さす。
「そこの彼も一緒に放り出しておいてくれる？　護衛対象を蔑むような、そんな使えない護衛、邪魔でしかないから」
「……え？」
「なっ!?」
茫然としたままのハルヴァラ伯爵夫人を置き去りに、護衛の青年は、心外だとばかりに目を瞠っていた。
どうやら自分では気が付いていなかったようなので、仕方なく理由を説明しておく。
「アナタは公爵家の護衛の動きを、ただ見ていた。あれがもし、子爵を止めるためじゃなく、ハルヴァラ伯爵夫人や息子のミカ君を狙うつもりだったら、間に合ってないでしょ？」
ファルコを見ながら言い切ると、護衛の青年は言葉に詰まっている。
「それに、ただの付き添いが、仮にも公爵家当主に代わって応対をしている人間に手を上げようとしているのを止めもしない。夫人が突き飛ばされたとて、助け起こしにもいかない。そんな木偶の坊、護衛と呼ぶのもおこがましいわ。だから一緒に出ていけって話。ご理解いただけた？」
唇を噛みしめて、両の拳を悔しげに握りしめている青年に、ファルコは「さっすが、お嬢さん」

と、軽く口笛を吹いた。
もはやそれ以上言葉を費やす気もない。
私は青年から視線を外して、いまだ茫然と床にしゃがみこんだままこちらを見上げているハルヴァラ伯爵夫人に視線を向けた。
「大丈夫ですか、ハルヴァラ伯爵夫人？　改めて団欒の間にご案内しますので――」
「いやぁ、実に素晴らしい！　護衛の本質をキチンと理解している！　いつの間に公爵邸に、このように優秀なご令嬢がおいでになられたのか！」
私が、ハルヴァラ伯爵夫人に手を貸そうとしたところで、玄関ホール全体に響き渡る程の大声が、私の鼓膜をビリビリと震わせた。
「!?」
声大きいっ！　何っ!?
思わず顔を顰めながら声のした入口に視線を投げれば、そこにはコスプレのお約束のような軍服に身を包んだ、背の高い、鍛えまくったと思しき体格の男性が、腕組みをして、仁王立ちをしていた。
「そこのバカ二人はこちらで預かろう！　公爵領の治安を預かる者としては、とても捨ておけぬからな！」
えーっと……？
今度は誰ですか？

「ベルセリウス将軍！　これは『先触れ』とは言わないと、毎年毎年、何度言わせれば……！」
誰も状況を把握出来ずに立ちすくんでいる中、仁王立ちの偉丈夫の後ろから息を切らせた青年が飛び込んでくる。
「将軍……？」
突然の闖入者に小首を傾げた私に、セルヴァンとファルコがそっと耳打ちした。
「レイナ様、あの方はベルセリウス侯爵領領主オルヴォ・ベルセリウス様と仰います。公爵領の領土防衛軍の長に立つお方なので、皆が敬意をこめて『将軍』と」
「根っからの軍人気質と言うか……フットワーク軽すぎんだよ、侯爵サマにしちゃ」
つまり、イデオン公爵領に三人いるという侯爵の内の一人か。
そういえば、領地経営はせずギーレン国との国境近くに本陣を置いて、公爵領内の治安を担って、一軍を率いている侯爵がいたと聞いたような。
……で、確か軍備の数値報告を副長がやっている間に、自軍から引っ張ってきた若手を〝鷹の眼〟と手合わせさせて、ちゃんと鍛えているかどうかを確かめさせるんだとも聞いたような。
そんなことを思い出していると、当のベルセリウス将軍が勢いよく顔をファルコに向けた。
「よお、ファルコ！　今年も来たぞ！　新人も連れてきているから、手合わせしてやってくれ！　もちろん私もな！」
「新人を見るのはいいけどな！　アンタはそろそろ、もうイイだろうがよ！」
「何を言う！　近頃、遠慮して相手をしてくれぬ者のほうが多いのだ！　ここは私が全力を出せる

貴重な場だ！」
「出すな！　何度庭を破壊すりゃ気が済むんだよ！」
なんだかファルコが気安いなー……と思っていると、なんと同い年とのこと。
一応相手が「侯爵」だとファルコも時々は思い出すらしいけど、実力が互角に近いらしく、張り合っている内に結局どんどんと敬語が崩れていくんだとか。
まあ方向性の違う人間同士、友情が成り立つことってままあるしね。
確かファルコはエドヴァルドより六～七歳年上と聞いた気がするけど……じゃあ、あの将軍サマもそういうことになるのか。
無駄に迫力があって、もっと年上に見える……とは言えない。
そんな風にじっと見つめていたせいか、ベルセリウス将軍の顔が今度は勢いよくこちらへと向けられた。
「それでファルコ、そちらの素晴らしく機転の利くご令嬢は、どなただろう⁉　高位の貴族令嬢の中に、これほどの逸材はいなかったと記憶しているが！」
「ちょっ……俺に紹介させんのかよ！」
「うむ！　随分とおまえも信頼を受けているようではないか！　共通の知人ということで、話をするのがよかろうよ！」
「マジか……」
がっくりとファルコが項垂れる。

うん、一般的な貴族の挨拶の仕方じゃないのはファルコでも分かるようだ。
それにしても嵐のごとく話が進んでいってしまう。
「あの……とりあえずハルヴァラ伯爵夫人とご子息に、団欒（ホワイエ）の間で休んでいただいてからのお話でも構いません……？」
恐る恐る私が片手を上げて提案すれば、その場にいた皆が我に返ったようだった。
「おお、そうであった！　伯爵夫人の方が先にいらしていたのに、大変に失礼をした！　今日は『明日の昼前に改めて軍備の年間予算の報告書を持って行く』との先触れに来ただけなのだ！　詫びと言ってはなんだが、さっきも言った通りにそこのバカ二人はいったん軍で引き取る！　お館様が処分をお決めになり次第、言ってくれれば引き渡すと伝えてくれ！」
「……ああ……はい……」
とりあえずベルセリウス将軍がひたすら大声で話を進めるため、私もほとんど頷くことしか出来ないでいる。
「ですから、これは一般的な『先触れ』の作法とは程遠いと、何度も……！」
片手で額を覆う副長？　さんが、なんだか痛々しい。
うん、まぁ、侯爵閣下が突撃してきて自分で『先触れ』とは……普通、言わない。
あれ、ちょっとどこかの仕立て屋兼デザイナー氏を彷彿（ほうふつ）とさせるような？
「伯爵夫人も心配めされるな！　コヤツらを軍で引き取る代わりに、領地にお戻りの際は我が軍からキチンとした護衛を付けるのでな！」

「あ……」
ベルセリウス将軍の大声に怯えていただろう、ハルヴァラ伯爵夫人が、わずかに目を瞠(みは)る。
そんな夫人を、将軍は一転して優しい目で見やった。
「ご夫君(ふくん)には我々も生前何かと世話になった。このくらいは、いつでもさせてもらうとも」
「……っ」
「ではご令嬢！　明日また改めて!!」
「はいっ!?」
いきなり現れた偉丈夫の将軍サマは、ファルコの手からコヴァネン子爵を引ったくるように奪い、護衛の青年の首ねっこをネコの如く摘みあげると、結局ロクな挨拶もしないまま、大股に公爵邸から立ち去って行ってしまった。
「すみません、将軍が本当にすみません！　ああ、あのっ、今、北と南の館の空き状況は、どのように……？」
ペコペコと頭を下げる副長？　さんが、やっぱりとても痛々しい。
『北の館』はオルセン侯爵一家が出立したばかりなので、まだ散らかっているかもしれないと伝えると「では我々は南の館をお借りします！　もちろん、先ほどの二人もそこで監視を付けてお預かりしますので！」と、敬礼と共に言い残して、彼も走り去っていった。
「ええっと……どのみちあの二人、南の館に軟禁しようかと言ってたから、いいのかな……」
脳筋、という言葉が頭の中をぐるぐると回っていたけど、口にはしない。

多分、適当な翻訳がないような気がする。
そして気付けばハルヴァラ伯爵夫人を床に座らせてしまったままだ。
私は、恐る恐る夫人に声をかけた。
「あの……何か、すみません……？」
「えっ!?」
実父をあちらこちらから「バカ」呼ばわりされた上に、最後は拉致同然に引っ立てられていってしまっては、私以上に現実が呑み込めないでいるに違いない。
謝罪のつもりで声をかけたものの、夫人の反応は鈍かった。
「いえ……その……むしろ私以外の方にまで手を上げるだなんて思ってもみなくて……こちらこそ申し訳なくて……」
「！」
うわ。
私もそうだけど、その場にいた全員が夫人の言葉を聞いて、こめかみに青筋を浮かべたような気がした。
その言い方は、過去に手を上げられたことがあるということの裏返しに他ならない。
親が子供を力ずくで従わせようとしている、ちょっとした――いや、ちょっとどころじゃない「家庭内暴力」案件。
自分が虐(しいた)げられていると、夫人本人はどこまで理解しているのか。

立ち読みサンプル
はここまで

あそこまでいくと、DVに加えてモラハラも乗っかっている。
ハルヴァラ伯爵領の特産品である白磁の話をしたいのは山々だけれど、それ以前に今の夫人をこのままにはしておけなかった。
仮に前向きな話がこの後まとまったところで、今のままだとあの子爵が高圧的な態度に出れば、夫人は逆らえずに権利や税収を全て言われるがまま渡してしまいかねない。
DVもモラハラも、行きつく先は洗脳と自分の意見を持つことの放棄だ。
白磁以前に夫人の話を聞いておかないと、夫人の感情が殻の内側に閉じ篭ってしまうことはもちろん、間違いなくお家の乗っ取りを敢行される。
ハルヴァラ伯爵領には、アルノシュト伯爵領への対抗馬として白磁を発展させて、これから力を蓄えてもらわないとならないのに、そんなことを起こさせるわけにはいかない。
というか、そんな建前を並べ立てている場合じゃない。
「とんでもない！」
だから、明らかに卑屈になりかけているハルヴァラ伯爵夫人を私は慌てて遮った。
膝をつき、彼女と視線を合わせて微笑みを作る。
「私が貴女と二人きりでお話がしたかったのです、ハルヴァラ伯爵夫人。ああ、いえ。息子さんは居てもらって大丈夫です。つまり、伯爵代理としての貴女とお話がしたかったということなんですけど」
「……伯爵代理……」

「旦那様が守って来られた土地を、貴女も守りたいと思っていらっしゃいますよね？　そして土台をキチンと固めて、息子さんに繋いでいきたいと」
「……っ」
ゆっくりと言葉を紡ぐと、コヴァネン子爵が居た間は怯えた色しか見せていなかった夫人の瞳に、光がともった気がした。
「あちらでお話させていただけますか」
団欒（ホワイエ）の間を視線で示す私に、夫人は無言でコクリと頷いた。

❀　❀　❀

あれは、中学の先生だっただろうか。
ある日の放課後、委員会が終わった後で気分が悪くなった私は、保健室の住人になっていた。
「レナちゃん、委員会？　あ、そう。私、お友達と約束あるから帰るねー」
最初（はな）から一緒に帰る気もないだろうに、委員会が始まる前に、私の顔色を見ることもなくそう言った舞菜は、いつのまにやらさっさと下校していた。
オトモダチとやらが取り巻きなのか彼氏なのかは知らない。
ただ、わざわざ「委員会」を強調して帰ったからには、ある程度遅くなるつもりで、帰ったら話を合わせろということなんだろう。